第十九講　実践演習⑼　『讃岐典侍日記』

次の文章は、筆者が女官として長年にわたって近侍し、寵愛を受けた堀河帝が死去した翌年のことである。これを読んで、後の設問に答えよ。

三月になりぬればア例の月に参りたれば、堀河院の花いとおもしろし。兼方、後三条院におくれまゐらせて、

　いにしへに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

とよみけむ、イげにとおぼえて、花はまことに色もかはらぬけしきなり。

昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月まではよひあかつきの例時絶えず、二十人の蔵人町・左近の陣など、僧坊になりたり。内裏にてありし所どもさびしげなる、見るにも、うせさせたまへりけむ院のうちの、aひきかへかいすみさびしげなるをご覧じて、

　かげだにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれかいひけむ

とよませたまひけむ、げにとぞおぼゆる。

宮の御かたに三十講をbおこなはせたまふとて、法華経を日に一品づつ講ぜさせたまふ。それ聞きに三位殿の参らせたまふ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に、具して参りて、講などはてて、御前近く三位殿をめせば、さぶらはる』。宰相とてさぶらはるる人、「三位殿はいますこし近く参らせたまへ。典侍殿は、今ははづかし」といふを聞かせたまひて、「それしもこそ、こころざし見ゆれ、見だてなく思ひいでもなげに見ゆる所を、忘れず見ゆる」とおほせられもはてず、むせかへらせたまへる音の聞こゆるに、われもたへがたし。

暮れぬれば、まかでぬ。

（藤原長子『讃岐典侍日記』）

注　堀河院…堀河帝在位中の仮御所。
後三条院…堀河帝より二代前の天皇。
七月…堀河帝の命日のある月。
例時…時を定めておこなう勤行。
院のうち…一条院の御所の中。一条院は、堀河帝から七代前の天皇。
かいすみ…ひっそりとして。
「かげだにも」の和歌…一条帝の中宮彰子の和歌。
宮…堀河帝の中宮篤子内親王。
三十講…滅罪のため法華経を講義する法会。
三位殿…藤原長子の姉、藤原兼子。亡き堀河帝の乳母であった。
宰相…古くから仕えている中宮篤子付きの女房。
典侍殿…筆者、藤原長子のこと。
今ははづかし…今日のところはご遠慮ください。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部ａ・ｂの意味として適当なものを、次の中からそれぞれ選べ。

ａ　ひきかへ

１　入れかわり　２　反対に　３　うってかわり
４　くりかえし　５　もとに戻り

ｂ　おこなはせたまふ

１　手伝われる　２　いとなまれる　３　しつらえられる
４　ご覧になる　５　参加される

問二　傍線部ア「例の月に参りたれば、堀河院の花いとおもしろし」の解釈として適当なものを、次の中から選べ。

１　欠かさず、毎月行われる堀河帝追善の法要に参上すると、堀河院の桜はいつも花のさかりのころを思い出させるものだった。
２　もし今、毎月行われる堀河帝追善の法要に参上したとすれば、堀河院の桜の花はきっと美しいものだろう。
３　いつものように、毎月行われる堀河帝追善の法要に参上したならば、堀河院の桜の花が相変わらず美しいことが確められたのに。
４　いつものように、毎月行われる堀河帝追善の法要に参上すると、堀河院の桜の花は実に美しく咲いている。
５　いつものように、毎月行われる堀河帝追善の法要に参上したならば、堀河院の桜の花がもつ独特の印象は変わらないだろう。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部イ「げにとおぼえて」について、筆者はなぜ「げに」と感じたのか。適当なものを、次の中から選べ。

1　筆者は、かつて兼方が後三条院の没後、「花は古来変わらずに何の物思いもなく咲いているが、私は帝を失った悲しみを忘れることができない」と詠んだことを想起し、あらためて兼方の心情に共感したから。

2　筆者は、かつて後三条院が先に逝去したとき、兼方に、「花は古来哀しみなど知らないといった風情で咲いているが、帝を失った悲しみは兼方と同じだ」と詠んだ歌を贈り、兼方と哀しみを共有したから。

3　筆者は、かつて兼方と後三条院とが相次いで逝去したとき、「花は昔と変わらず咲いているが、私は友人や帝を失った悲しみを忘れることができない」と詠んだことを想起し、悲しみをあらたにしたから。

4　筆者は、かつて兼方が後三条院の没後、「今年は花にも帝を失った悲しみの気持ちがにじんでいるようだ」と詠んだことを想起し、あらためて兼方の和歌に共感したから。

5　筆者は、兼方が後三条院の没後、「花が昔と変わらず咲いたのは、花は悲しみの気持ちを持たないからだ。しかし私たちだけは帝を失った悲しみが忘れられない」と詠んでよこしたことを想起し、あらためて兼方の友情に感謝したから。

問四　「かげだにも」の和歌の説明として不適当なものを、次の中から選べ。

1　亡くなった帝本人がいないばかりか、「かげ」すなわち面影も残っていないと、帝のいない哀しみを、「だに」を用いて強調している。

2　「雲のうへ」は内裏のことを喩えている。

3　いったい誰が「玉のうてな」と呼んだのかと問いかけ、帝のいない内裏はもはや「玉のうてな」とは呼べない、と哀しみの気持ちを強調している。

4　「かげ」「雲のうへ」「玉のうてな」など掛詞を多く用いている。

5　彰子の「かげだにも」の和歌を引き合いに出して、自分の悲しみを表している。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　二重傍線部「る」の文法的意味・用法が同じものを、次の中から選べ。

1　七月十五日の月にいでゐて、せちに物思へる気色なり。
2　堀河殿にて、舎人が寝たる足を狐に食はる。
3　さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよ。
4　后御入内あるべき由、右大臣家に宣旨を下さる。
5　汝が持ちてはべるかぐや姫たてまつれ。

問六　本文の内容に合致するものを次の中から二つ選べ。

1　堀河院だけでなく中宮の御所でも、桜の花は満開であった。
2　かつての堀河帝の御所は、今はすっかり堂や僧坊に改築されてしまっていた。
3　堀河帝の逝去ののち、朝夕の供養が続けられていた。
4　筆者は、中宮の御所に出向くことには最初から気が進まなかったので、三位殿の呼び掛けにも一緒に出向くことはなかった。
5　宰相は、乳母である三位殿と筆者を御前に呼び寄せた。
6　悲しみゆえに筆者は、日暮れを待たずに退出した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十九講　復習問題

①「例の、聞きもや合はせ給ふ」の現代語訳として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　例のごとく、早くも女君のお耳に入ったようだ
イ　ためしに、女君がお聞きになっているかどうか
ウ　いつものように、女君が他からお聞きになるだろうか
エ　ふだんから聞いていたことに女君がきっと思い当たられるだろう

②「いかがしたまひけむ」の傍線部の文法的意味として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　打消推量　　イ　伝聞推定　　ウ　現在推量
エ　過去推量　　オ　過去完了

③和歌の中の中心的な名詞に関連の深い語を詠み込む修辞技法を何というか。最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　掛詞　　イ　枕詞　　ウ　序詞
エ　縁語　　オ　折句

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十九講　模範解答

問一　a　3　b　2
問二　4
問三　1
問四　4
問五　4
問六　2・3

〔現代語訳〕

三月になったので、いつものように、毎月（行われる堀河帝追善の法要に）参上すると、堀河院（＝堀河帝在位中の仮御所）の桜の花は実に美しく咲いている。（かつて）兼方が、後三条院に先立たれ申し上げて、

いにしへに…＝花は古来と色も変わらずに咲いたことだ。花は何の物思いもないのだなあ。（私は帝を失った悲しみを忘れることができない。）

と詠んだとかいうのが、なるほどその通りだと（あらためて兼方の心情に共感して）思われて、花は本当に色も変わらない様子である。

昔（＝堀河院が御所であった時）の清涼殿を御堂になさって、（堀河帝の命日である）七月までは朝夕の時を定めておこなう勤行が絶えず催され、二十人の蔵人の宿舎・左近衛府の役所なども、僧の宿舎になっている。（華やかな）御所であった所が（今は）寂しげなのを、見るにつけても、（かつて）亡くなりなさった一条院の御所の中が、うってかわりひっそりとして寂しげなのを（中宮彰子が）ご覧になって、

かげだにも…＝（亡くなった一条帝本人ばかりではなく）面影さえも留まることのなかったこの内裏を、（美しく立派な）玉の台（うてな）といったい誰が呼んだのだろうか。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

とお詠みになったとかいうのが、なるほどその通りだと思われる。

（堀河帝の）中宮様の御方では三十講〔＝滅罪のため法華経を講義する法会〕をいとなまれるということで、法華経を毎日一品ずつ講義させなさる。それを聞きに（姉の）三位殿が参上なさるので、（私も）連れ立って参上して、講義などが終わって、（中宮様が）お側近くに三位殿をお招きになったので、伺候なさる。宰相といって（中宮様に古くから）お仕えなさっている女房が、「三位殿はもう少し（中宮様の）お側近くにお進みなさいませ。典侍殿〔＝筆者のこと〕は、今日のところは御遠慮ください」と言うのを（中宮様が）お聞きになって、「その典侍こそ、誠意が見える。見栄もなく懐かしさもなさそうに見える所を、（こうして）忘れずに姿を見せてくれる」と最後までおっしゃることができず、むせび泣いていらっしゃる声が（几帳を隔てて）聞こえるので、私も（悲しみを）堪えることができない。

日が暮れたので、退出した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十九講　解答解説

〈解説〉

① 「例の」が用言にかかっていく場合は、「いつものように」と訳す。「もや」は「～だろうか」という意味。よって、正解はウ。

② 「けむ」は、過去推量の助動詞。よって、正解はエ。

③ 和歌の中の中心的な名詞に関連の深い語を詠み込む修辞技法は、「縁語」である。よって、正解はエ。

〈解答〉

①　ウ　②　エ　③　エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。